

2613  $^{111}\text{In}$ -oxine 標識血小板動態

高橋 豊, 赤坂清司 (天理病院 血内)  
岡本 陽 (全上 RI)

$^{111}\text{In}$ -oxine で血小板を標識し, その生身性分布, 破壊もしくは消費速度の測定とその部位の検出等の動態の測定を行った。

ACD-bag 採血した 200ml 全血から差別遠沈により濃縮血小板 5~10mg を得, これを 2 等分し, その一つに  $^{51}\text{Cr}$  300 $\mu\text{Ci}$ , 他に  $^{111}\text{In}$ -oxine 130~500 $\mu\text{Ci}$  を添加, 混和し, 夫々標識した。 $^{111}\text{In}$  の標識率は 1.5~2 分ふ置で 30 分ふ置時の標識 level の約 85% に達し,  $^{51}\text{Cr}$  標識率 (30 分ふ置) と同等またはそれ以上であり, 血小板数の影響もより小であった。

標識血小板の輸注直後からの脾部位での,  $^{51}\text{Cr}$ ,  $^{111}\text{In}$  夫々至適  $\gamma$ -ray level における両放射図間, および循環血中の回収率と生存曲線に特記すべき差異はみられなかった。血小板の破壊 (消費) の著るしく亢進した例を除き, 血漿中への  $^{111}\text{In}$  の遊離は殆んど認められなかった。

$^{51}\text{Cr}$  標識赤血球寿命測定,  $^{99\text{m}}\text{Tc}$  による脾 Scinti-graphy 等との併用の適応のある症例に適用し, 従来の  $^{51}\text{Cr}$ -標識法に比べ臨床応用上有利である事を認めた。

2614  $\text{In-}^{111}\text{-oxine}$  による血小板標識 (第 3 報)

心腔内血栓の検索

油井徳雄, 内田立身, 松田 信, 室井秀一, 待井一男, 刈米重夫 (福島医大 1 内)

昨年の本学会では主に人工血管部への血小板の関与について,  $\text{In-}^{111}\text{-oxine}$  標識血小板を用いて検討し報告した。今回は各種心疾患において心腔内血栓の検索を行ったので報告する。被検者の血小板を  $\text{In-}^{111}\text{-oxine}$  にて標識後輸注し, シンチレーションカメラにて経時的に観察した。僧帽弁膜疾患 10 例, 心筋梗塞 1 例に検査を行った。その結果, 心エコー図にて心腔内血栓の存在が疑われた 4 例すべてに心腔内血栓が描出された。僧帽弁膜疾患は左房に, また心筋梗塞例は左心室瘤部に血栓が描出された。心筋梗塞例は抗血栓療法後に再度検査を行ったが, 今度は血栓が描出されず, 視覚的に治療の有効性を確認した。心エコー図にて心腔内血栓の存在を疑わせる所見を認めなかった 7 例中 1 例に左房内血栓が描出された。血栓が描出された 1 例は, その後行った手術の際に 0.3g の左房内血栓を確認した。

以上より本法は, 心腔内血栓の診断および治療の効果判定に有用であり, 今後普及すべき方法であると考えられる。

2615  $\text{In-}^{111}\text{-oxine}$  による血栓描出に関する検討

林真, 西村恒彦, 西村圭弘, 香川雅昭, 山田幸典, 伊藤慎三, 小塚隆弘 (国循セン, 放)

インジウム・オキシンにより血小板標識を行い, 各種血栓性疾患において血栓の描出を試みた。試薬は amersham 社製キットを用い, 標識操作は採血量 26ml で, ほぼ使用書通り行つた。標識率は 40~70% 得られ, 同時に血小板機能として, 血小板寿命, 粘着能, 凝集能,  $\beta$ -TG 値なども調べてみた。症例は腹部大動脈瘤や下肢の閉塞性動脈疾患の人工血管置換術後, Gruntzig カテーテルによる血管拡張術後および深部静脈血栓について施行した。臓器分布のイメージングは 3, 24, 48 時間と経時的に追跡した。3, 24 時間像では赤血球や白血球も標識されたものが血液プール像として残り不明瞭な場合もあるが, 48 時間以後では血液プール像も消え, 明瞭に描出されてくる。全身イメージでは肝, 脾の RI 集積が最も高く, 全身の血栓分布がとらえられる。 $^{111}\text{In}$  オキシン血小板は体外から血栓部位をうかがえる現在最も優れた方法と考える。

2616  $\text{In-}^{111}\text{-oxine}$  標識白血球による化膿性病巣の描出

宇野公一 (千大, 放部) 内山 暁 (山梨医大, 放)  
今関恵子, 鎌田 栄, 三好武美, 有水 昇 (千大放)  
秋庭弘道 (千大, 放技校) 北方勇輔 (君津中央, 外), 植松定夫 (千大, 放部)

昨年の本学会で,  $\text{In-}^{111}\text{-oxine}$  標識白血球と  $\text{Ga-}^{67}\text{citrate}$  による膿瘍描出を家兎で比較検討し報告した。今回は臨床例について膿瘍あるいは化膿性炎症巣の疑いのある 50 症例に本検査を施行し, その有用性を検討した。

$\text{In-}^{111}\text{-oxine}$  は 500~800 $\mu\text{Ci}$  を患者白血球に標識後同一患者に静注した。24 時間後にガンマカメラにて全身を撮像したが, 必要によりそれ以後も撮像した。

陽性像は 20 症例に認め, そのうち 17 例は膿瘍であり他の 3 例は化膿性骨髄炎であった。肝, 脾, 骨髄以外の描出はほとんどなかった。本検査は specificity が極めて高く, 急性化膿性病巣の検出に有効であった。